

在の flap volume は正常組織に比べ同等以上のもの13/15例, volume reduction は平均27.8%であった。舌の運動障害と咽頭閉鎖不全は舌切除量と相関して増加した。食物は全例経口摂取可能, 会話可能は14/15例であった。

27. 遊離前腕皮弁にて再建を行った下顎歯肉癌の1例

今井 裕 (獨協医大・口外)

遊離前腕皮弁で再建を行った下顎歯肉部の1例を経験したので, その概要を報告した。

患者は 3+3 歯肉部の高分化型扁平上皮癌 (T₂N₀M₀) と診断された72歳の女性で, 1990年9月5日全麻下に, 両側上顎部郭清と一塊に歯肉部腫瘍を摘出し, 同部を左側前腕皮弁 (8×6 cm) で再建を行なった。顕微鏡下に橈骨動脈と上甲状腺動脈, 橈側皮静脈と前頸静脈を各々血管吻合を行なったが, 術後血流の異常もみられず, 皮弁の生着は良好であった。

28. 9歳女兒に発生した球状上顎嚢胞の1例

増崎雅一, 村瀬博文, 富永泰弘

田中真樹, 平 博彦, 麻生智義

柴田敏之, 富田喜内

(東日本学園大・歯・口外2)

武藤寿孝, 金沢正昭

(同・歯・口外1)

賀来 亨, 奥村富三

(同・歯・口腔病理)

今回われわれは, 球状上顎の9歳時発生が疑われた1例を経験したので, その概要を報告した。患者は11歳の女兒で, 左側側切歯, 犬歯間の腫脹と波動を認め, 本学矯正科より当科紹介された。X線写真では同部に透過像を認め, 球状上顎嚢胞と診断し, 摘出術を施行した。また, 矯正治療中のX線写真を遡って検討したところ, 9歳時の発生が疑われた。

29. 嚢胞開窓療法における内腔縮小の経時的計測(Ⅱ)

谷中正幸, 齊藤佳明, 熱田藤雄

土屋晴仁 (千大)

甲原玄秋

(千葉県こども病院・歯科)

12例の濾胞性歯嚢胞を開窓し生理食塩水を腔内に満たすことで嚢胞の縮小を経時的に最長19か月測定し, 部位, 大きさ, 年齢別に検討した。①年齢別では20歳以上の群は縮小がやや遅い傾向をみたが, 他の群間では差はなかった。②腔は開窓後3か月では約30%となった。8か月

までは縮小は進むがその後僅かな内腔が残存した。③X線での観察で縮小が固定化した後も縮小した腔に仮骨化が認められた。

30. 顎関節部に挿入した皮弁から生じたとされる類表皮嚢胞の1例

富岡敬子, 道谷弘幸, 中川徹郎

武藤寿孝, 金沢正昭

(東日本学園大・歯・口外1)

平 博彦, 村瀬博文, 富田喜内

(同・歯・口外2)

顎関節授動術などの際に, 中間挿入物として遊離皮膚を使用することは少なくないが, 埋入した皮膚から類皮あるいは類表皮嚢胞を生じたという報告例はまれである。今回われわれは, 62歳女性に遊離皮膚を中間挿入物として顎関節授動術を施行し, その5年後に耳前部の腫脹をきたした顎関節部の類表皮嚢胞の1例を経験したので報告した。

31. 副鼻腔に発生した Aspergillus 症の2例

詹 前沢, 内山ハーディ洋澄

花沢康雄, 熱田藤雄 (千大)

加治晴夫, 西村和子, 宮治 誠

(同・真核微研)

症例1: 60歳, 女性。喘息にて steroid 剤内服。主訴は右眼窩下部の疼痛で, CT にて右篩骨洞に強い不透過像を指摘され来科。化骨性病変のもとに摘出術施行。病理診断: Aspergillus 症。培養による同定: Penicillium。症例2: 26歳, 女性, 皮製品取扱者。左頬部の自発痛にて来科。[8]の歯性上顎洞炎の疑いにて[8]の抜歯術と上顎洞根治術施行。病理診断: Aspergillus 性上顎洞炎。症例1は日和見感染, 症例2は皮革カビの飛沫感染が考えられた。

32. 慢性クローズドロック症例に対するパンピング療法の評価について

大和田恵子, 桜井希巳江, 永海大志

石崎泰広, 関根光治, 山野井弘充

堀 稔, 工藤逸郎

(日大・歯・口外1)

Manipulation technique や splint 療法が奏効しなかった慢性 closed lock 症例15例に対し pumping 療法を行ない, その効果と pumping 後の後療法(強制開口訓練および splint 療法)を行なった7例の効果について検討した結果, pumping による改善度は平均6.2mm, 後